健康診断

函館市医師会
函館西部脳神経クリニック
小保内主税（おぼないちから）

会員の皆さんは、定期的に健康診断は受けておられるでしょうか？　昔、病院に勤務していた時、職員健康診断の季節になると、院長から「職員健診で、医師の受診率が最も悪くて、保健所から注意されている。必ず受けるように」という言葉を毎年、聞かされました。他の病院のことは存じませんが、おそらくどこの医療機関でも、状況は同じようなものではないかと想像しています。それは、医者の不養生ということもあるでしょう。また、「都合の悪い真実は知りたくない」という心理が働いていることが大きいのではないかと考えています。勤務医に限らず、開業医にも「健康診断なんてものは、人を病気にするものだから、俺は受けないことにしている」と豪語（？）していた先生がいました。かなり高齢になるまで現役で診療をされましたが、最終的に癌が原因で亡くなられました。ご遺族から、発見されたときには、かなり進行していたとも伺いました。健診を受けていたら、助かっていたのだろうかと考えてしまいます。また、随分前のことになりますが、関東の私立医大の脳外科教授と、講演会後の懇親の場でお話しできる機会があり、「先生は、脳ドックを受けたことがございますか？」とお尋ねしたところ、「何があっても、俺は覚悟ができているから、そんなものは受ける必要はない」と、これまた豪語（？）されました。ご自身の覚悟はよいのですが、立場を考えたときに、それでいいのだろうかと首をひねってしまいました。「覚悟」があるなら、検査を受けてもいいのではないかとも思いました。

さて、日本脳ドック学会というものがありますが、これも何年も前の話で恐縮ですが、発表演題の中で「危機管理としての脳ドック」（古い話で、正確なタイトルではないかもしれませんがご容赦ください）というのがあり、演者（脳外科医）の勤務する病院で、医師を除く（！）、数百人に及ぶ多くの職員（全員ではなかったと思います）に対して脳ドックを行ったところ、かなりの数の無症候性の脳血管障害が見つかったとのこと。なかでも、脳外科医としては未破裂脳動脈瘤が最も懸念されるもので、かなりの数が見つかり、その後のフォローアップ期間中に脳動脈瘤が破裂して不幸な転帰をとった例もあるとのことでした。演者は、医師を特別扱いするわけではないが、替えが利き難い職種なので、病院の危機管理として、勤務している医師には脳ドックを検討するべきと主張していました。

偶然発見された疾患の取り扱いは、いろいろ難しい問題もありますので、脳ドックに限らず、健康診断をむやみに強制するのはいかがとは思いますが、自分の体について、知らないよりは知っておいた方がいいと思っています。

かつて、私の先輩が脳動脈瘤破裂で亡くなられました。実は、その先輩は開業した機会に、自らの脳を精査したところ、未破裂脳動脈瘤が発見されました。ご本人も対応に迷い、動脈瘤を専門とする後輩に治療の相談をしていたらしいのですが、結局、治療する決心はつかなかったらしく、突然死することとなりました。このような事情を他科の先生にちょっとお話ししたところ、「亡くなられた先生は、脳外科医でありながら、脳外科医の治療を信用していなかったんだな」と言われました。専門であるからこそ、悩むこともあると思うのですが。

医師は、知識がある故に、検査で何か見つかった時の対応に悩むのでしょう。そこで先に紹介した教授のように「何があっても受け入れる覚悟」で、自らの健康に目を瞑っている方が多いのではないかと想像しています。

私は、開業を決意したあと、開業前数年の間に脳の検査も受け、開業後は毎年欠かさず、医師会の健診を受けています。死に至るような病が見つかったら、狼狽えると思いますが、受け入れる覚悟も持っているつもりです。ただ、職員や家族に対する責任を考えると、できるだけの努力はしておきたいと考えるのです。会員の皆さんは、どうお考えでしょうか？　健康診断、がん検診、脳ドックなどいろいろありますが、医師が受けたくないものを、一般市民にお勧めしていいのでしょうか？　健康診断が、本当に健康に良いものだとお考えならば、自ら率先して受けるべきではないでしょうか？